愛知県

歴代会長
初　代 藍川　清英（昭23年～）
第２代 加藤　錐鎖（昭27年～）
第３代 中村　　清（昭57年～）
第４代 宵木　信樹（昭61年～）

事務局　〒464　愛知県名古屋市千種区若水3-2-12　愛知工業大学名電高等学校内
野牧　一雄　　TEL 052-721-0311

〈年次別概況〉

昭和23年
昭和25年第５回国民体育大会が愛知県にて開催されるのを受けて、当時ボクシングの選手役員として活躍していた中村清を中心に協会が創立され、第３回国体より柔道の選手を中心に急造チームを作り参加することができた。これを契機に名古屋鉄道株式会社の重役・藍川清英を会長、中村清理事長の陣容で愛知県体育協会へ加盟し、愛知ウエイトリフティング協会として発足することになった。

昭和24年
来年度愛知県で開催される第５回国民体育大会の運営要員の養成と競技の普及を図るため、高等学校にクラブを作ることが必要となり、名古屋電気高等学校（現愛知工業大学名電高等学校）に初めてのクラブが発足、手造りのバーベルで高校生の練習会が開かれ普及活動を始めた。

昭和25年
第５回国民体育大会を愛知県名古屋市の勤労会館ホールで開催した。一昨年より選手の養成に努めた結果、鉢呂、吉田、平賀、後藤の４選手を参加させることができた。また、補助役員として多くの高校生部員も参加して大会運営を円滑に進め、大会を成功裡に終了した。

昭和26年
昨年の国体を開催したことで協会としての基盤が確立し、更なる発展のために高校・大学にクラブの設立等を働きかけた。名古屋市中区の柔道場「緑風会」の協力で、バーベルを備えつけた練習場を開設することができ、選手の競技力向上と共に競技の普及に努めた。

昭和27年
会長に藍川清英の後輩でやはり名古屋鉄道株式会社の加藤錐鎖を迎え、更なる発展を願い結束を堅める。

昭和28年
第８回国体でＬ級平賀利夫が本県選手として初めて全国優勝をなしとげる。

昭和29年
東海地区への競技の普及が全般的なレベルアップにつながると考え、この年に平賀利夫の友人である岐阜県土岐市の安藤昭久氏（現岐阜県協会副会長）宅の庭、土岐市駅前広場でデモンストレーションを行い、岐阜県での競技普及を図ると共に協会の設立発足に協力した。

昭和31年
三重県にも協会をと、当時大学生で愛知県で選手として活躍していた村田柳太郎（現三重県協会副会長）とともに協会設立に向けて活動。規約の作成、諸手続について当時の三重県庁職員舘義夫氏の協力をいただき三重県に協会が設立されることになった。併せて、翌年第12回国体が静岡県で開催されることから、愛知県で選手として活躍していた平賀利夫が自分の郷里静岡県佐久間町へ帰り、地元の有志を集めて静岡県協会を設立、その記念事業として、東海四県の選手を集め第１回東海四県選手権大会を静岡県佐久間町で開催した。

昭和32年
第12回国体が静岡県清水市で行われ、発足間近の静岡県協会に協力して大会運営に当たる。

昭和33年
名古屋球場レフト側スタンドの下に中日ドラゴンズの選手のトレーニング場として中日ヘルスクラブが開館した。そのトレーニング場の主管に理事長の中村清があたり、本競技の専用練習場として多くの選手が利用した。また、県内の各種大会をすべてこの中日ヘルスクラブで実施し、多くの愛好者が集まり、競技力向上に役だった。

昭和34年
伊勢湾台風で県内は大被害を受けた。そのため第14回国体には災害地の復興に協力することで不参加となる。

昭和35年
本年より国体に少年男子が加わり、東海北陸ブロック予選会が実施された。少年男子Ｌ級で山内一吉が優勝。

昭和36年
第16回国体に成年男子Ｍ級で石川邦夫が優勝。

昭和37年
第17回国体に成年男子LH級で石川邦夫が優勝し、世界選手権大会に日本代表選手として参加。本協会としては初の海外派遣選手である。

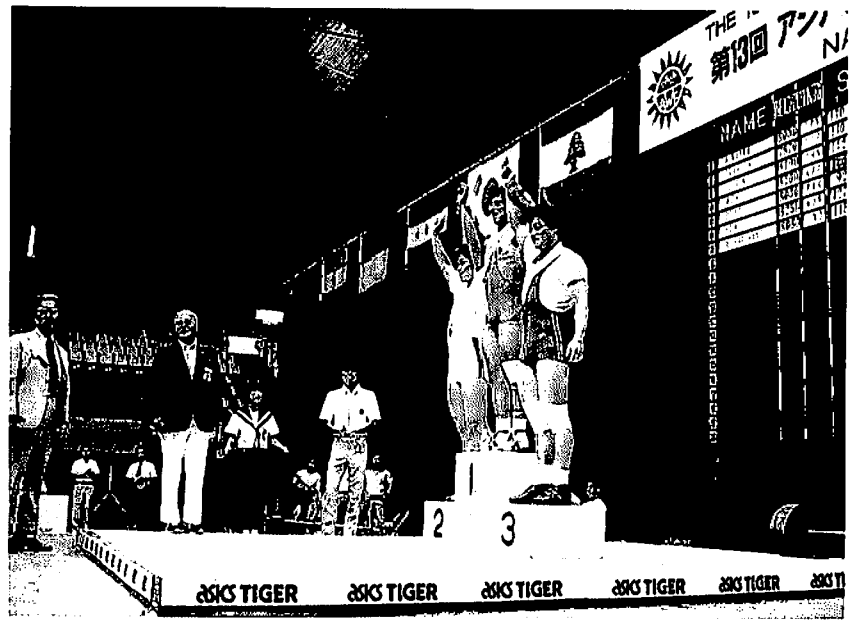
昭和38年
東京オリンピック大会を前にして本協会理事長中村清が日本選手団ヘッドコーチとして選ばれ、年間の多くを長期合宿練習に参加して、日本代表選手の競技力向上に寄与した。来年度全国高校総合体育大会が岐阜県土岐市で開催されるのに対して、本県からも大会準備のために会場設営、その他大会運営について協力をする。

昭和39年
東京オリンピックの年、本競技は三宅義信選手の金メダル獲得により、競技に対する理解度、普及面で大いにアピールすることができた。また、参加選手全員が入賞するという活躍が、他の競技種目に比べ、今後の競技力の向上普及事業に役立ってくれた。岐阜県で開催された全国高校総体には本県役員も多数参加して、盛会裡に終ることができた。

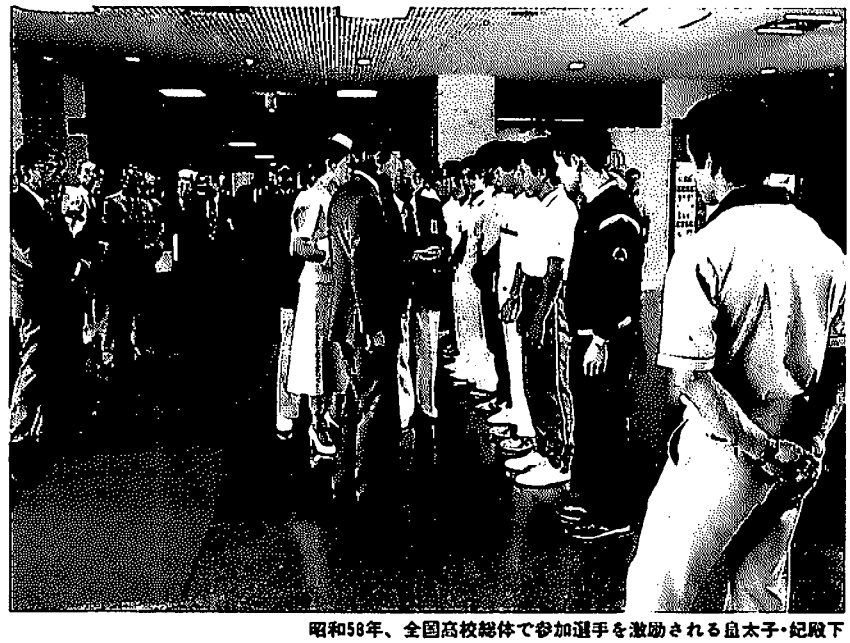
昭和40年
第20回国体が岐阜県土岐市で開催。本県からも多くの競技役員がこの大会の運営に応援参加した。

昭和41年
第21回国体成年男子100kg級で村松繁が優勝。
理事長中村清が愛知県体育協会理事に就任、従来からの社会体育の重要性と競技の発展のために幅広く活躍し、日本協会の競技会責任者として常に大会運営に努力した。

昭和42年
第22回国体成年男子75kg級で三輪定広が優勝。
昭和43年
第19回メキシコ・オリンピック大会に三輪定広(名古屋鉄道)が初めて本県から代表選手として出場した。第23回国体60kg級で加藤正雄、100kg級で村松繁が優勝し、団体第4位となる。
昭和44年
第24回国体は団体第6位に終る。
昭和45年
第25回国体成年男子67.5kg級で加藤正雄が優勝。加藤はジュニア日本記録を60kg級と67.5kg級2階級で樹立した。
昭和46年
第26回国体成年男子82.5kg級で角南保が優勝。
昭和47年
第20回ミュンヘン・オリンピック大会に加藤正雄が出場。この年の国体では成年男子67.5kg級で加藤正雄、少年男子52kg級で平田薫、60kg級で西村勇夫の3名が優勝し、団体第3位と活躍した。
昭和48年
この年から従来本競技の3種目のうちP競技が廃止となり、SとC&Jの二種目となる。
第28回国体成年男子67.5kg級で加藤正雄、75kg級で角南保の2名が優勝した。
昭和49年
第30回国体が三重県亀山市で開催されるのに伴なって、事前の開催準備のために本県より役員が各種リハーサル大会等に協力参加した。
昭和50年
第30回国体には成年男子75kg級で角南保が優勝。本大会では本県から大会運営役員が協力参加して盛会裡に大会を終ることができた。
昭和52年
本県で初めての全日本社会人兼実業団選手権大会を、愛知県体育館において開催した。
第32回青森国体の成年男子75kg級で角南保が優勝。
昭和53年
第33回長野国体の成年男子56kg級で湯地保雄、60kg級で加藤正雄、75kg級で角南保が優勝し、団体第2位となる。
昭和54年
地元名古屋で1988年オリンピックをと誘致運動が高まり、その一環として1981年(昭56)に名古屋で国際大会を開催すべく準備をすすめ、アジア選手権大会を開くことに決定。
地元協会を中心に県・市教育委員会でアジア選手権大会準備委員会を結成し、会場の決定、宿舎の確保など競技会開催に向けて準備に入る。
第34回宮崎国体で成年男子75kg級で角南保が3連勝、少年男子56kg級で長谷川博一が優勝し、団体3位となる。
昭和55年
アジア選手権大会に向け、日本協会の指導のもと地元行政機関とも連携して実行委員会を設立。名古屋オリンピック実現に向け各方面での準備に入り、会場として愛知県体育館が決定された。
昭和56年
8月14日～19日の4日間にわたり、第13回アジア選手権大会を開催。参加国12ヶ国、役員、選手、約250名を迎え世界連盟のショードル会長、アヤン事務局長にも来名してもらい、名古屋でのオリンピック誘致運動がこの機会に強く進められた。大会では56kg級、中国の呉選手がSで126.5kgの世界新記録を樹立するなど、大成功に終ることができた。東海各県からも多くの役員に国際大会の経験をつんでもらうため競技役員として参加していただき、名古屋オリンピック誘致運動の一つとして役立った。
昭和57年
第2代会長加藤雄鋭が急逝、第三代会長に中村清が就任する。
昭和58年
全国高校総合体育大会が全国で初めて全館冷房設備の整った名古屋市露橋スポーツセンターで開催し、参加した役



昭和56年、第13回アジア選手権大会82.5kg級表彰式


昭和58年、全国高校総体で参加選手を激励される皇太子・紀殿下

員、選手の皆様から名古屋の暑さを忘れて競技に集中できた大会として好評であった。
この大会場へは２日目に皇太子・妃両殿下のご臨席をいただき、本競技をご観戦いただいた。参加選手には強く印象に残った大会であった。

昭和59年

本年度日本で開催の日韓ユース大会が、地元の選手が全国総体で優勝し日本代表にも選ばれ、名古屋市で開催し日韓両国の親善に役立った。

昭和61年

１月19日会長中村清急逝。愛知県体育協会副会長・競技委員長として永年体育協会発展のために貢献があり、ご霊前に愛知県体育協会より特別功労章がおくられ、県内外の多くの体育関係者の見送りを受けた。
第４代会長には副会長であった青木信樹が就任する。

昭和62年

第42回沖縄国体の成年男子56kg級で古賀丈士が優勝。

昭和63年

第３回全国高等学校選抜大会を名古屋市総合体育館で開催した。

平成元年

本年より中学生選手の育成を始め、全国中学生大会に選手４名が初参加。

平成２年

第２回全国中学生大会を平成６年に国体開催が決まった瀬戸市体育館にて開催した。

平成３年

３年後のわかしゃち国体にむかって、協会は選手の強化事業、大会役員養成事業、地元瀬戸市と連携しての会場整備等、協会役員の分担作業も多くなり協会役員の活動に活性化がみられた。

平成４年

本年度の事業のしめくくりとして、第８回全国高等学校選抜大会をわかしゃち国体の会場である瀬戸市体育館にて開催した。地元瀬戸市の応援もあり、国体の準備のためにも有益な大会となった。市民にも多数参加をいただき、本大会を目前にして大成功裡に終ることができた。

平成５年

第49回わかしゃち国体のリハーサル大会として全日本社会人・実業団・マスターズ・女子記念大会を開催。全国より今までにない参加選手があった。選手の宿泊については心配をしていたが、瀬戸市内の各施設等の協力もあり、国体に向け万全の受入れ体制で臨むことができた。地元実行委員会の活躍により、３日間に亘る大会運営はすべて順調に進めることができた。

平成６年

第49回国民体育大会を開催した。この大会で大会史上初めて最新の電光掲示板を２会場に設置し、コンピューター作動による選手氏名、所属、体重、試技重量、種目別記録、T記録等を試技判定後瞬時に電光表示するシステムを開発し、観客の皆様により一層本競技を理解してもらうのに役立った。
また、大会期間中は地元陶器の産地をPR、ふれあい広場では地元特産のきしめんの提供など、競技会と共に参加役員・選手と瀬戸市民の多くの皆様との交流ができた。

〈現役員〉

会長		青木　信樹
副会長		小池　澄
理事長		野牧　一雄
副理事長		諏訪　宏和　安島　将門
理事	(総務委員長)	高橋　力
〃	(強化委員長)	平野　治
〃	(審判委員長)	福本幸之助
〃	(普及委員長)	吉田　克己
〃	(総務)	金子　定広
〃	〃	坪井　貞憲
〃	〃	波多野孝臣
〃	〃	榊原　義祐
〃	(強化)	新井谷秀夫
〃	〃	松尾浩二郎
〃	〃	福本　繁明
〃	(審判)	入江　紀夫
〃	〃	岡村　匡喜
〃	〃	佐藤　功
〃	(普及)	加藤　正雄
〃	〃	中村　誠二
〃	〃	海野　隆
監事		粕谷　康博
〃		山室　哲男

三重県

歴代会長

初　代 増山　英一（昭和33年～）
第２代 村田　捨吉（昭和41年～）
第３代 石井彦一郎（昭和45年～）
第４代 服部　　修（昭和52年～）
第５代 村田柳太郎（昭和61年～）
（代行）
第６代 水谷　謙司（昭和62年～）

事務局　〒519-01　三重県亀山市本町1-10-1　亀山高等学校内
森　浩之　　TEL 05958-3-4560

〈沿 革〉

協会創立以前

名城大学陸上部に席を置いていた村田柳太郎が、ウエイトリフティングに転向、卒業と同時に家業の旅館、寿司屋を継ぎ、自宅の一室を専用練習場として開放する。

四日市近鉄駅前の至便なところだけに、電車通学の学生や市内で働く勤労青年の良きオアシス的存在の場所であった。

特に初めの頃はウエイトリフティングのみならずボディビルを愛好する者も多く、いつも談笑の絶えない10数名の家族的な若者の社交場でもあった。

協会創立に至る経緯

昭和31年に協会が発足し、その年から県民体育大会の公開競技の一種目として各郡市を転戦した。

四日市市、上野市、桑名市でのバーベル愛好者による献身的な準備、競技運営、熱のこもった試合で、県体育協会役員各位の好評を得たことと、昭和32年には本県初の国体選手、椋樹立芳（Ｂ級）、村田柳太郎（Ｌ級）、監督真田久一郎が静岡に出場した事が、三重県体育協会への正式加入を決定づけた。

〈年次別概況〉

昭和31年

村田柳太郎を中心に、愛好者が集い初練習を開始、練習場は村田宅の一室を利用する。
三重県民体育大会の公開競技として、第10回大会に参加した。

昭和32年

静岡国体に一般男子初出場する。

昭和33年

日本ウエイトリフティング協会、三重県体育協会に正式登録を行う。
会長に増山英一、理事長村田柳太郎を中心にうぶ声をあげる。
第12回大分国体Ｌ級鈴木浩司選手が６位入賞と協会のスタートに花をそえてくれた。

昭和37年

東海四県ウエイトリフティング選手権大会でFe級平野行信優勝する。

昭和39年

初の県外大会として第７回東海四県ウエイトリフティング選手権大会を、伊勢市の県営体育館で開催。
三重高等学校に県内初のクラブ活動の発足、顧問田中公治。

昭和40年

三重水産高校に２校目のクラブが発足、顧問平岡一能。

昭和41年

第１回三重県記録会を四日市市公会堂にて開催し、６階級に20名のエントリー、全て高校生であった。
第13回全国高校総体（青森県黒石市）に、三重高校チーム４名初出場する。
第20回国体東海北信越９県ブロック高校大会に初出場（福井県坂井農業高校）。
三重県民体育大会の得点種目になり、津新町小学校体育館で開催する。

昭和42年

第１回三重県高校大会の開催、三重高校、三重水産高校の２校で水産で実施する。

昭和43年

上野高校阿山分校３校目の部活動、平岡一能転勤により開始する。

昭和44年

三重県高体連に加盟し、全国高体連ウエイトリフティング部部会に登録する。
東海高校総体を四日市市中部西小学校で開催する。
第24回国体東海北信越９県高校子選大会でFe級稲森守が初優勝をする。

昭和45年

48年全国高校総体、50年三重国体に向け協会の新体制を取り、会長に石井彦一郎、理事長に平岡一能就任。平岡は亀山高校に転勤する。
東海高校総体団体初優勝を上野阿山分高がする。

昭和46年

四日市中央工業高校が部活動を開始、顧問岩城基吉。
第８回全日本社会人大会でM級鈴木浩司（東芝三重）優勝する。

昭和47年

亀山高校、四日市中央工業高校に、練習場完成、共に11m×18m。
日生学園高校、加藤仁のもと部活動を開始する。
福島全国高校総体Ｆ級上田稔（亀山高）チャンピオンとなる。

昭和48年

平井一正、教員として亀山高校に勤務、第27回世界選手権に出場しＪ３位。全国高校総体を開催、団体戦亀山高３位、四中工７位。個人でFe級近藤信明が優勝する。東海国体高校ブロック予選の結果初出場となる。
三重国体に向け、強化スタッフが決定。少年監督・岩城基吉、コーチ・加藤仁。成年監督・長崎清、コーチ・田代正広。選手は少年成年共候補選手として、合宿等を組み入れる。

昭和49年

平井一正、第５回ソ連友好大会にてFe級優勝、Ｓ126kgの世界新記録を樹立。また第７回アジア競技大会で優勝とＪ155kgの日本新記録樹立。
最後の国体ブロック予選で少年優勝。茨城国体では団体４位となり初の天皇杯得点を手中に納める。Ｆ級上田稔（中京大）Jr世界新記録樹立。
県民体育大会を国体同様のシステムにて実施。
福岡全国高校総体MH川北訓夫（四中工）２位、11月に国体リハーサルを兼ねて、全日本社会人大会を開催。

昭和50年

四日市中央工業高校がすばらしい活躍をする。東海総体団体優勝、全国総体団体優勝（出場者小林常宏、椎葉道明、別所健一、山中卓、森一素）、三重国体総合優勝、少年優勝成年２位（成年メンバー平井、平間、鈴木、佐藤）。

四日市中央工業高校、昭和50年全国高校総体優勝

何年も前から準備、強化をしたが優勝にはあと一歩の状況の中で優勝でき、今迄の苦労がよき思い出となる。
第35回全日本選手権で平井一正、佐藤が共に優勝する。

昭和51年

四日市中央工業高校、東海総体団体2連勝。また長野全国高校総体団体準優勝。第21回モントリオール五輪Fe級平井一正3位。第2回Jr世界選手権に別所健一が出場、コーチの平岡一能も参加。
佐賀国体団体2連勝。また平井が、S127.5kg、T282.5kgの日本新記録を樹立する。

昭和52年

四日市中央工業高校、東海総体団体で3年連続優勝、東海高体連より表彰を受ける。また、岡山県全国高校総体でも団体で準優勝する。
第37回全日本選手権大会67.5kg級で平井S135.0kgの日本新記録を樹立する。
青森国体、団体で3年連続優勝、少年のメンバー和田、中村、鈴木。

昭和53年

四日市中央工業高校が東海総体団体戦で3年連続優勝。
第38回全日本選手権で平井S137.5kg、T307.5kg、日本新記録で優勝。
長野国体少年、総合共4位。少年の部で浜田優勝。山形全国高校総体で四日市中央工業高校、4位、3位と内容差敗け。

昭和54年

ソ連国際友好大会に監督平岡、選手平井が参加する。
東海総体で四中工高校が5年連続優勝。
また、兵庫全国高校総体では団体2位。

昭和55年

東海総体で四中工高校が6年連続優勝。

昭和56年

群馬全国高校総体にて田端が100kg級で優勝し、日韓ユース大会に参加する。

昭和57年

鹿児島全国高校総体にて亀山高校が団体2位、個人的には森浩之優勝。吉田茂、桂山浩治、舘義浩等が3位内入賞する。
日韓ユース大会に森浩之(亀山高)、舘義浩(四中工)。平岡一能監督、岩城基吉がコーチとして埼玉県大会に参加する。

昭和58年

全国高校総体で吉田茂優勝、舘義浩S2位、J・Tで3位入賞。
第1回アジアJr選手権大会、前田修二(日体大)参加。
第1回全日本マスターズ大会で、鈴木(東芝三重)が優勝する。

昭和59年

奈良国体で少年の新開、井上、樋口が入賞する。鈴木はマスターズ2連勝する。

昭和60年

石薬師高校、平井のもとクラブ活動を開始。
鳥取国体で前田2位、黒川雅司5位、西井克明6位入賞。
マスターズ大会で鈴木3連勝。

昭和61年

北海道全国高校総体、谷延亮がS1位、T4位。小川公士S・T4位。
山梨国体で中村斉、吉田茂、前田修二、黒川雅司の成年全員入賞。

昭和62年

東海高校総体で四中工高が7回目の優勝をする。
全国高校選抜大会で山神裕康(四中工高)が3位入賞する。

昭和63年

兵庫全国高校総体で四中工高校が団体4位。戸田晃S1位、小林尚徳(亀山)3位。
京都国体に戸田S・Tで2位、伊藤司S5位J7位。また、全国女子選手権、国体記念女子大会で1位と、窪田早苗(石薬師高校)が本県で初の女子リフター。

平成元年

2人目女子リフター小平展代(石薬師高)が全国女子大会で3位となる。

モントリオール・オリンピックFe級3位の平井一正

協会の生みの親・村田柳太郎氏

平成２年

東海高校総体で亀山高校が団体優勝、２位に石薬師高校と、三重県勢頑張る。

全国女子大会で有竹良子が６位、小河久美が４位(共に石薬師高)。また、国体記念杯では有竹３位、小河４位。

平成３年

協会創立35周年記念事業を四日市都ホテルにて開催、協会に功績を残された方々、全国大会で３位までの選手・監督・団体74名の表彰と記念誌を発刊。式典は来賓、招待者および会員とで盛大であった。

平成４年

千葉国体、鈴木純平Ｓ３位Ｊ８位、服部高明Ｓ５位(共に四中工)に入賞。全国選抜服部Ｓ２位、鈴木Ｓ３位Ｊ７位Ｔ４位で県の優秀選手賞を受賞した。

平成５年

東海総体で石薬師高校が団体優勝。栃木全国高校総体＋99kg級で中川卓也(石薬師高)Ｓ２位Ｊ３位Ｔ２位、＋99kg級中西賢次郎(同)Ｓ５位Ｊ８位Ｔ５位。

全日本マスターズ(愛知)、お隣りの県でもあるので少しでも盛大になればと今迄の間で一番多く出場した。入賞の選手は以下の通り。

豊田康文、田中光男、加藤忠明、岡本文博、Ｓ優勝の長崎清。

全国選抜(茨城)、岡田豊和(石薬師)Ｓ４位Ｊ２位Ｔ２位に入賞する。

平成６年

富山全国高校総体、愛知国体で古市毅(四中工)、前田和樹(亀山)、岡田豊和(石薬師)等入賞。

全日本選手権(福島)、伊藤隆行がＪで優勝、Ｓ･Ｔは２位。

マスターズで鈴木浩司が３種目共優勝。豊田康文がＪで優勝した他、田中、長崎、岡本等も入賞。

国体記念大会で儀賀哉子、松宮紅美恵(共に石薬師高)が３位入賞。

全国選抜で加藤総志(四中工)が３位入賞、女子松宮が２位入賞する。

当協会の生みの親である村田柳太郎が60歳の還暦に成年の選手として参加。また、協会からの記念のコスチュームで頑張った。

平成７年

亀山高校に試合場完成する。

Jr世界選手権に中川卓也(拓殖大)が出場。

全日社会人(広島)で、楠直幹が優勝。

福島国体に成年の部中川貴経・卓也が、本県初の兄弟で出場し共に入賞。

第１回東海高校選抜大会を愛知県で開催。今後４県持ちまわりで開催する。

〈現役員〉

会　長	水谷　謙次		
副会長	村田柳太郎	森川　典春	
	平岡　一能		
理事長	岩城　甚吉		
副理事長	長崎　清		
常任理事	加藤　忠明	岡本　文博	
	田城　正広	後藤　繁夫	
	豊田　康文	平井　一正	
	黒川　雅司	松本良由善	

岐阜県

事務局　〒509-51　岐阜県土岐市土岐津町土岐口　土岐商業高等学校内
小栗　和成　　TEL 0572-54-1291

歴代会長

初　代 前田　仲一（昭和27年～）
第2代 安井　　潔（昭和32年～）
第3代 安藤　　甫（昭和34年～）
第4代 大野　嘉久（昭和35年～）
第5代 木村　秀雄（昭和37年～）
第6代 安藤　昭久（昭和59年～）
第7代 福井不二男（昭和61年～）

〈沿　革〉

協会創立以前

昭和26、27年頃、土岐市で安藤昭久を中心に数名の者が名古屋市まで見学に行き、愛知県協会より競技方法や技術等の指導を受け、P、S、Jの三種目を知った。当時、器具もなく、鉄棒にコンクリートを固めて作ったバーベルを使用し、安藤の自宅で始めたのが本県のウエイトリフティング競技の産声となった。近隣の若者たちが興味本位でやりはじたのがきっかけとなった。

協会創立に至る経緯

昭和27年、前田仲一を会長とし、安藤昭久理事長、安藤春三が中心となって土岐市ウエイトリフティング協会を創立、同時に岐阜県ウエイトリフティング協会を創立した。事務局を土岐市泉町の理事長宅に設置した。

昭和29年、県体育協会に仮加盟、同年より県民体育大会にオープン参加(昭和29年～36年)した。この年、日本ウエイトリフティング協会に加盟、昭和37年に県体育協会に正式加盟し、県民体育大会に正式参加となる。

〈年次別概況〉

昭和27年

土岐市協会を結成し、同時に県協会が形のうえで設立された。前田会長、安藤理事長によって、県民にウエイトリフティング競技を普及する目的で、若者たちを集め指導に入った。形のうえでの協会であり、資金もなく愛好者の集まりであり、器具や練習設備もない状況であった。

昭和28年

岐阜で最初の大きな大会として全愛知・全岐阜の競技会を開催した。

昭和29年

県体育協会に仮加盟、日本協会に加盟する。これを機会として試合を多く開催し、普及に努めた。全愛知・全岐阜・名城大学との大会を開催。

昭和30年

第10回神奈川国体に初参加。F級、B級、Fe級の3階級に出場。
第1回東海四県大会(静岡県)に参加。

昭和32年

会長に安井潔、理事長に片野金吉が就任、競技普及と指導に安藤昭久が当たった。

昭和33年

富山県開催の全国高校総体に土岐商業高校が本県より初出場した。また、県内で土岐津小学校体育館を会場として第3回東海四県大会と第6回全岐阜・全愛知大会を開催。弱小協会であるが、対外試合等により成果を表わしてきた。

昭和35年

新会長に大野嘉久を迎え、組織の充実と競技力向上に力を入れる。その第一歩として、県立土岐商業高校で正式にクラブ活動が発足した。
岐阜県として、昭和39年に全国高校総体、そして昭和40年に国体を開催することが決まり、本協会として土岐市を会場とし、協会役員・選手を中心に地元の協力を得、決意も新たにした。

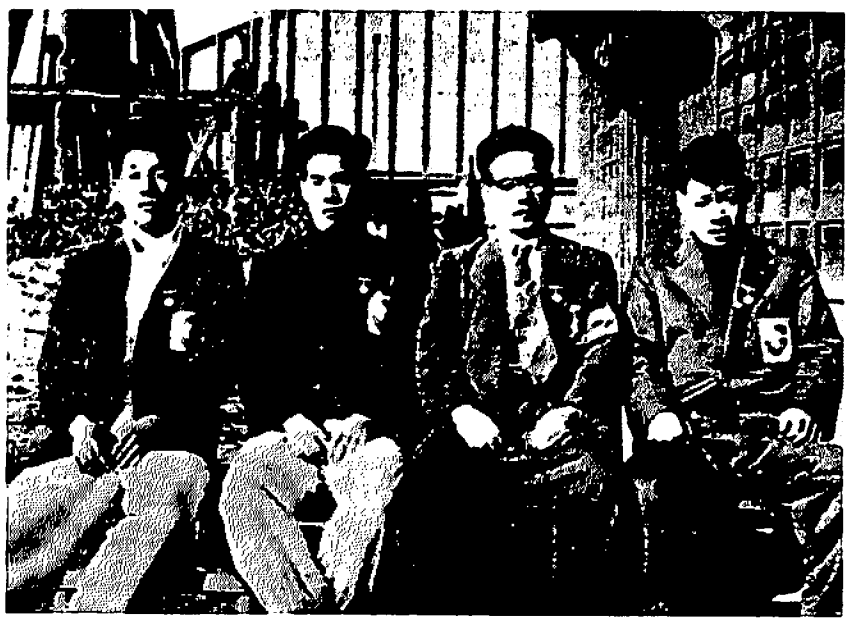
昭和37年

第20回岐阜国体に向け、県体育協会の組織の充実と競技力向上に向けての施策がなされ、強化委員会が発足した。本協会は高校選手の育成こそ急務であるとの総意から、福井不二男が委員に就任する。会場地である土岐市を中心に、協会の組織充実を図るべく市当局との話し合いを重ね、市会議員である木村秀雄を会長に選出、新たに体制をかためるに至った。競技の専門家として、東京より田中詮氏を迎え、協会の資質と競技力の向上を図る。

昭和38年

中央協会との接触、審判技術の修得、競技運営の研究を進め、国体選手を獲得するために各大学との交流をすすめる。山口国体での入賞をめざし選手団を送る。
高体連が強化種目校として、土岐商と中京商の2校を決定。また、新たに岐阜東高と土岐高にクラブを設立した。

昭和39年



第10回神奈川国民体育大会に初参加した本県選手団　昭和30年

土岐市に国体実行委員会の結成をみて、市長二宮安徳の協力により「市技」として育成強化を図る。
この年、土岐市民センター(下石町)で全国高校総体を開催、土岐商高が総合5位に入賞。東海北陸ブロックの国体予選を同会場にて開催。
新潟国体にて、地元出身のB級鈴木孝臣が初入賞する。
日体協、全国高体連の指導の下、土岐市が国体へのムードを一層高めた。

昭和40年

「第20回岐阜国体を成功させよう！」をスローガンに土岐高・土岐商高の生徒達、そして各関係団体が一丸となり本番に望んだ。また、第12回全国高校総体(大分)において、土岐商高が総合で準優勝、個人ではL級小野、M級小島が優勝。この輝しい結果が国体への勢いとなった。
国体においては、天皇・皇后両陛下を土岐市民センターにお迎えし、市民一同感激を極めた。その上、競技成績は総合優勝と、個人では優勝を筆頭に全員入賞という金字塔を打ち立てることができた。これも過去5年間にわたり選手強化を血みどろになりやり抜いた結果である。まだ浅い県ウエイト協会の歩みの中で、見事、歴史に残る立派な活躍をし、大成功と絶讃をはくし、これを機に岐阜強し、国体連続入賞、世界に雄飛するいしずえを築くことになった。

昭和41年

国体の大成功がウエイトリフティングの一層の普及と協会の充実につながり、支部協会も結成を見た。
大分国体で見事4位入賞をした。

昭和42年

岐阜支部協会の結成。埼玉国体に4位入賞。特記すべきは高校選手の活躍である。高校団体優勝、個人でF級安藤隆行、B級安藤謙吉、L級中田高広の三選手が優勝した。

昭和43年

土岐市民センターにおいて、全日本選手権大会兼メキシコ・オリンピック予選大会を開催した。
福井国体総合で準優勝を収める。高校選手、安藤(隆)・安藤(謙)の両選手が2年連続で全国高校総体と国体制覇の偉業を遂しとげる。

昭和44年

長崎国体において、安藤(謙)・小野の優勝により7位に入賞。高校ブロック大会に敗れる。

昭和45年

国体ブロック予選に勝つための高校選手強化を図る。岩手国体において、総合3位の入賞。また、小野・安藤両選手が日本代表として国際大会に参加する。

昭和46・47年

国体において、3位(46年)、6位(47年)の入賞。国体にて8年連続入賞という輝しい成績をあげる。
ミュンヘン・オリンピックにFe級安藤、L級小野(8位入賞)の両名が出場。また、B級安藤は世界選手権で2位となる。以上の成績は、岐阜国体からの成果が大きく実を結んだものといえる。

昭和48～50年

中田・安藤の両名が高校教員として採用され、選手の育成に当たることとなった。競技成績については、優秀選手の県外流出により、また高校選手においても弱体化がみられるようになった。

昭和50年～63年

県体協の方針により、長期強化計画のもとに、本協会においても活動拠点の施設設備、指導者等の充実に努力を重ねることとなった。
普及面において、高校クラブ活動の充実と優秀選手の発掘に力を入れることにより底辺の拡大を図り、併せて支部協会の結成を図る。
この10年間では、戸松、小栗の両名が日本代表選手となり、細やかな希望をもたせてくれた。

平成元年～7年

本協会としての強化努力が表われず、一流選手を育成できなかった。
ソウル・オリンピックに小栗(6位入賞)、戸松の2名が参加、活躍してくれたことは、県内のリフターにとって嬉しいことであった。
協会役員、指導者においても少しづつではあるが、新しく芽を出しはじめ、支部協会や高校においても変化が生れてきている。
平成12年全国高校総体が本県開催と決定したことが刺激となり、本県のウエイト協会の発展とトップレベルの選手育成を目標に、協会役員及び関係諸氏の協力と援助を得て、ウエイトリフティングの一層の発展に努めている。

第20回岐阜国体(於土岐市民センター)本県役員と選手団

〈現役員〉

会　　長　福井不二男
副 会 長　安藤　春三　福島　照博
　　田中　競夫
理 事 長　藤岡　英機
理　　事　大橋　弘実　安藤　謙吉
　　小栗　和成　三輪　和男
　　中田　高広　佐々木重明
　　広瀬　勝正　亀井　茂徳
　　山村　武夫　西野　利彦

滋賀県

事務局　〒520-02　滋賀県大津市本堅田3-9-1　県立堅田高等学校内
中尾　久　　TEL 0775-72-1206

歴代会長
初　代 藤野　嘉男（昭和42年～）
第2代 大高　道夫（昭和49年～）
第3代 木村新太郎（昭和53年～）

〈沿 革〉

協会発足

滋賀県におけるウエイトリフティング競技は、昭和40年代初めに、堅田高校の体育教諭岩井克美により始められた。

堅田高校に続いて日野高校、比叡山高校、草津高校などでもクラブ活動として行われていたようだ。県民体育大会等公式競技会や協会設立の契機となったのは、やはり社会人選手の養成が始まったことであった。

社会人選手の養成は、昭和42年4月、大津市打出浜にオープンした、大津市勤労青少年ホームのウエイトリフティング講習会が始まりである。

勤労青少年ホームにおいては、前述の岩井克美や京都府立中京青年の家ウエイトリフティングクラブ員の指導のもと、講習会が開催され、その後この受講生がクラブを作り、社会人の拠点として、今日までその活躍が引き継がれている。

社会人の養成とともに協会設立の機運が高まり、昭和42年8月の県民体育大会を前に、岩井の努力により、会長・藤野嘉男（当時県議会議員）、副会長・大高道夫（当時大津市議会議員）、理事長・岩井克美、その他ホーム職員が理事に就任して協会が発足した。

〈年次別概況〉

揺籃期

昭和42年、第20回県民体育大会に初めてウエイトリフティング競技の公式大会が開催された。

会場は膳所高校で、参加選手は、高校では堅田高校と日野高校、社会人ではホームで練習している選手をはじめ、福島（日本精工）、木村（草津）など多数をかぞえた。

また、この年の埼玉国体に社会人選手が初出場して、福島がL級で25位、木村がM級で29位の好成績をあげている。

埼玉国体以後、社会人については毎年国体に選手を送っているが、本県選手が入賞するのは、なお10年以上後となる。

当初勤労青少年ホームには公認のバーベルやプラットホームがなく、十分な練習ができなかったが、昭和43年、会長、理事長の努力により、ホーム裏庭にウエイトリフティング専用の練習場が完成した。また、滋賀日日新聞社から公認のバーベルセットが寄贈されるなど、徐々に練習環境が整備されていった。

この間、岩井克美をはじめ中京青年の家の米田久男（現県協会理事）の指導を仰ぐとともに、中京青年の家とも交流を深めつつ、着々と実力をつけてきた。

昭和48年

第28回千葉国体には、B級で二柳順滋、L級で二柳裕滋の兄弟選手が出場し、大いに話題となった。

昭和49年

1月、藤野会長が逝去され、新会長に大高道夫が、副会長に川瀬正己（堅田高校校長）、井上昭男（大津市労政課長）が就任、その他の役員は留任と決った。

近畿ブロックでは、毎年6月の最終日を目途に社会人大会が開催されていたが、昭和49年に滋賀県が会場地となり、堅田高校体育館で開催された。

本大会は協会にとって初の他府県を含めた大会であり、兵庫県の藤代選手が日本記録に挑戦するなど大成功裡に終り、本県関係者も競技運営に大いに自信をつけることができた。

この頃、昭和56年に滋賀県で国体が開催されることが決り、本協会もびわこ国体に向け、組織の充実と選手強化に本格的に取り組んでいくこととなる。

昭和51年

4月、大阪体育大学を卒業した中尾久選手が堅田高校に赴任し、同校のウエイトリフティング部の顧問に就任、その後高校の指導者として活躍し、現在本協会の理事長としてその職責を果たしている。

この年の佐賀国体には、堅田高校1年生の西川荘吾が初参加するとともに、自らも67.5kg級で本県選手として初の7位入賞を果たした。翌年、大阪商業大学を卒業した佐藤幸雄（故人）が木村機械建設工業㈱に入社、また、60kg級の学生チャンピオン中京大学の西村勇夫が国体少年組会場地の安曇川高校に赴任、本県のウエイトリフティング界は第2期を迎えることとなる。

昭和53年

7月に会長が木村新太郎（木村機械建設工業㈱社長）に代り、理事長に槌田昇一（大津市役所）、事務局長に中村恒晴（大津市役所）と役員が交代、新たに中尾、佐藤両氏が理事に就任し、国体開催に向けての協会組織づくりを行った。

国体に向けて協会の組織がある程度整備され、一方では強化対策についても着実にその歩みが見られ、高校においては中尾、西村が指導者として、また、社会人は佐藤が中心となり強化を図った。

この結果、昭和53年の長野国体少年の部52kg級において、堅田高校西川荘吾が優勝し、日本高校新に挑戦するなど大いに気を吐き、いよいよ隆盛期を迎えることとなった。

昭和54年

75kg級の学生チャンピオン福田輝彦が木村機械建設工業㈱に入社、また、同じく100kg級チャンピオンの宮下覚（現堅田高校教諭）が県文化体育振興事業団に採用され、びわこ国体に向けての準備も熱気を帯びてきた。

この年は、本協会にとって画期的な年であった。それは、中国のナショナルチームを迎えて日中友好大会を開催したことである。本県においては、全国レベルの大会の開催経験さえなかったが、日本協会からの強い要請もあり、

国体を迎えるムードづくり等への配慮から、本県で引き受けるとの会長の決断がなされた。この準備にあたっては、会長を筆頭に事務局が一丸となって大会の運営に当たり、成功裡に終えることができ、全国大会開催の自信を固めるにいたった。
また、同年の全日本選手権やモスクワ・オリンピック選考会において、福田が優勝して代表選手に決定した。さらに、宮崎国体少年組においては、堅田高校の3選手が活躍し、その年新設された90kg級で、山田一広が、前年の西川に続き見事に優勝を飾った。

昭和55年

西川(法政大学)がモントリオールで開催されたジュニア世界選手権大会に出場するなど、本県選手は着々とその実力を伸ばしてきた。
この年、びわこ国体のリハーサル大会として、全日本社会人選手権大会を国体会場である安曇川町総合体育館で開催した。そして、75kg級福田がS147.5kg、J180kg、T327.5kgとすべての種目で日本新記録を、また100kg級宮下がSで150kgの日本新記録を樹立し、本番への自信を深めた。

昭和56年

びわこ国体において、運営面では、日中友好大会や全日本社会人大会の経験を生かし、無事成功裡に終えることができた。
成績については、成年の部で西川、福田、宮下に、前年木村機械建設工業(株)に入社した湯地で戦い、結果、福田、宮下が優勝、他の選手も上位入賞を果たし、念願の団体優勝を成し遂げることができた。少年の部は3選手ともに入賞はしたものの、団体8位内入賞を果たすことができなかった。
この結果、総合では2位となり、相応の成績を残すことができた。

昭和57年～59年

この時期は、びわこ国体の反動で低迷した時期であった。国体強化策として、移入選手により一応の成果を収めることはできたが、びわこ国体以後を展望して高校現場の指導者確保を熟慮しておかねばならなかったが、目前の強化、大会準備・運営に追われ、その視点が欠けていたのが大きな反省点であった。

昭和60年～63年

高校選手の層が最も厚く、特に堅田高校では部員30名余りの大所帯となり、活況を呈していた。同校に保護者を中心に育成後援の組織が結成され、昭和63年同校で開催された近畿高校選手権は、全国大会なみに特設ステージを組み、保護者・OBを総動員して盛況な大会運営を行うことができた。
また、昭和59年～61年にかけて成年の部52kg級において西川(県文体事業団)が3連覇を達成したことは特筆に値するでき事であった(第39回奈良、第40回鳥取、第41回山梨国体)。

平成元年

高校選手の徳岡紀之(堅田高校→明治大学、元年物故)の活躍が記録に残る。徳島全国高校総体で+100kg級で3位と健闘し、北海道国体では京都の超高校級選手安田に次いで2位と、自己新記録をマークする見事な成績をあげてくれた。それだけに同君の訃報に接し、哀悼の念を禁じえなかった。

平成2年～4年

この3年間は、安曇川高校が活躍した。まず、平成3年は奥村昌利が春の選抜大会で100kg級3位、全国高校総体90kg級4位、石川国体では同級S3位と健闘した。この年、安曇川高校OBの堀内康晴(明治大学卒)が、県立高校商業科の教員として滋賀県に採用された。待ちに待った若手指導者の誕生である。
また、平成3年12月、安曇川高校に宿願の新練習場が完成した。その落成記念として、西村勇夫の母校である中京大学関係者、また高校時代の恩師である愛工大名電高校の高橋力氏と同校のウエイトリフティング部を招いて盛大に記念式典、大会を挙行した。そして、その新練習場完成直後の平成4年

中国重量挙選手団が安曇川町訪問(昭和54年)

昭和56年びわこ国体、滋賀県選手団

ジュニア世界選手権(昭和56年、ユーゴスラビア)での56kg級・西川荘吾

3月の全国高校選抜大会(千葉県)において同校の吉原靖幸が見事に100kg級優勝の栄誉に輝いた。安曇川高校にとっては、初の全国優勝の快挙であった。

平成5年

2月に、安曇川高校に続き堅田高校にも待望の新練習場が完成した。延べ床面積200m²でトレーニングの有効面積180m²と、滋賀県の競技活動の拠点として今後の有効活用が待たれる。

平成6年

堅田高校から日本体育大学に進学した長井彰良が、4月のジュニア全日本76kg級を大会新記録で制し、同年の全日本では83kg級4位に入賞する活躍ぶりを見せてくれた。久々の若手有望選手の出現に協会あげて期待をよせている。

今後の課題

本県は協会と高体連専門部が一体となったまとまりのある組織づくりをめざしてきた。昭和56年のびわこ国体以後、小世帯の悲哀を痛切に味わいながら、組織づくり、選手強化、底辺の拡大、施設の整備、学卒者の受け皿づくり、指導者の養成等に取り組んできたが、その成果の是非はいかんともしがたいものがある。特に高校現場の指導者育成が次代のために急務であると確信している。

〈現役員〉

会長	木村新太郎		
副会長	堀江　泉	中村　恒晴	
理事長	中尾　久		
副理事長	正村　英雄		
理事	米田　久男	西村　勇夫	
	西川　荘吾	山元　治	
	宮下　覚	大芝　恵一	
	飛田　高志	山田　一広	
	木平　一巳	山田　一則	
	深田　雅治		

京都府

事務局　〒611　京都府宇治市宇治矢落34-2　ユニライフ宇治Ⅲ304号
柏木　佳久　TEL075-672-6788

歴代会長

初　代　竹上藤次郎（昭和15年～）
第2代　谷本　昌平（昭和18年～）
第3代　河合　正史（昭和23年～）
第4代　井上　昭治（昭和46年～）
第5代　清水　武男（昭和61年～）
第6代　佐々木　巌（平成元年～）
第7代　新居田耕三（平成6年～）

〈沿革〉

協会創立以前

昭和14年7月に安藤熊夫氏を京都にコーチとして招き、重量挙げの手ほどきを受ける。多くの大学を持つ京都では、当時、重量挙げを大学スポーツとして位置づけ、その先陣を切って同志社大学に重量挙部が設置（現在は休部中）され、活動を始める。

協会創立に至る経緯

昭和15年春、京都駅前にあったステーションホテルにおいて、三島通陽子爵をお迎えし、主に同志社大学の学生を中心として関西重量挙協会を結成した。そして、初代会長は当時の京都府商工会議所の会頭であった竹上藤次郎。後に、この関西重量挙協会が京都ウエイトリフティング協会の前身となる。その後、昭和16年大東亜戦争（太平洋戦争）が勃発し、京都府体育協会の組織改変がおこなわれ、重技部会が設立される。重技部会とは、レスリング、ボクシング、重量挙げの三つを合わせた競技団体である。そして、この重技部会の初代会長として、また、京都ウエイトリフティング協会の第2代目の会長ともなる谷本昌平が就任した。その当時のことを谷本会長が次のように書いている。

「重量挙げは名称が勇ましいにもかかわらず、集まってくるのはやせぽっちばかりで、体育行進の時などは恥ずかしいくらいで、わたし（谷本）一人が肥った体をして一応面目を保っていたが、それにはやせた者が重量挙げをやって肥りたいから入会したのが多く、やむを得ない次第であった。戦争末期には、やせてヒョロヒョロした者に50kgの俵差しなどを教えてくれと軍人会から頼まれたが、2合1勺の配給米では声を出すのもしんどかったので誰一人挙げられる者はいなかった。」（谷本昌平）

こうして戦争直前の不安定な情勢の中、京都ウエイトリフティング協会を設立したのである。

〈年次別概況〉

昭和15年

関西重量挙協会（京都ウエイトリフティング協会の前身）を設立する。

昭和21年

第1回国体ウエイトリフティング競技を京都市の円山公園音楽堂において開催した。第1回国体では、谷本昌平（2代目会長）がM級で優勝。F級においても村上宗雄が準優勝、中川が第3位に入賞した。

昭和40年

第2回全日本社会人選手権で、B級新居田耕三（高槻市立小学校・教）がT277.5kgで5位入賞。また、LH級井上昭治（日新電機）がT315kgで6位入賞。

昭和41年

第3回全日本社会人選手権で、B級新居田耕三（高槻市立小学校・教）がT272.5kgで6位入賞。

昭和42年

第3回近畿社会人選手権大会で、京都府が団体戦で準優勝する。

昭和43年

第5回全日本社会人選手権で、B級佐野保（村上製作所）がT265kgで6位入賞。Fe級米田久雄（三谷伸銅）がT332.5kgで3位入賞。L級では、海東三郎（東洋電波）がT335kgで4位入賞を果たした。

昭和44年

第24回国体で、F級高橋憲一（同志社大学）がT272.5kgで8位入賞。Fe級米田久雄（三谷伸銅）がT342.5kgで4位入賞をし、京都としては久しぶりの好成績となった。

第6回全日本社会人選手権でも、Fe級米田久雄（三谷伸銅）がT345kgで5位入賞。

第5回近畿社会人選手権大会を京都市の西京極体育館で開催。京都府は準優勝した。

昭和45年

第7回全日本社会人選手権で、LH級大森康正（京都市消防局）がT370kgで6位入賞。

第6回近畿社会人選手権大会で、京都府が団体戦で優勝する。個人戦においても、2階級優勝、4階級準優勝、3階級3位という好成績であった。

昭和46年

第8回全日本社会人選手権で、Fe級米田久雄（三谷伸銅）がT345kgで6位入賞。

第7回近畿社会人選手権大会で、京都府が団体戦で準優勝した。

昭和47年

第9回全日本社会人選手権で、Fe級米田久雄（三谷伸銅）がT335kgで3位、同級亀本一正（ユニチカ宇治）がT317.5kgで6位入賞。M級海東三郎（日本電池）がT360kgで6位入賞。LH級大森康正（京都市消防局）がT382.5kgで6位入賞。出場4選手がすべて入賞という好成績を残した。

第8回近畿社会人選手権大会で、京都府が団体戦で準優勝した。

昭和48年

第10回全日本社会人選手権で、LH級佐々木大（日本電池）がT260kgで5位入賞し、同選手は実業団選手権でも優勝。また、MH級で出場の大森康正（京都市消防局）も、T260kgで5位に入賞した。

昭和49年

第10回全日本社会人選手権で、MH級で出場した大森康正（京都市消防局）がT265kgで4位に入賞した。

昭和52年

第32回国体で、成年90kg級上田登（城南開発興業）がT277.5kgで6位に入賞した。また、成年100kg級では、大森康正（京都市消防局）がT260kgで5位入賞を果たした。

昭和53年

第33回国体で、成年100kg級大森康正

(京都市消防局)がT267.5kgで4位入賞を果たした。

昭和54年

第34回国体で、成年90kg級上田登(城南開発興業)がT282.5kgで7位に入賞した。

昭和56年

京都両洋高校に京都府初のウエイトリフティング部が設置された。

昭和57年

京都府から岩滝町へ第43回国体(京都国体)ウエイトリフティング競技の開催要請。

昭和58年

第43回国体(京都国体)岩滝町準備委員会設立。

昭和59年

第43回国体(京都国体)ウエイトリフティング競技の岩滝町開催が内定。

昭和60年

第43回国体(京都国体)ウエイトリフティング競技の岩滝町開催正式決定。

昭和61年

第43回国体(京都国体)ウエイトリフティング競技岩滝町実行委員会設立。

第41回国体で、82.5kg級西川智之(西宇治高校)がT242.5kgで3位入賞。

京都府内2校目として水産高校(現在は、海洋高校)にウエイトリフティング部を設置。

京都府高体連にウエイトリフティング専門部が加盟承認された。

昭和62年

京都国体のリハーサル大会として近畿社会人選手権を岩滝町で実施した。

全国に先駆け女子の強化に取り組んだ京都は、日本大学農獣医学部藤沢校舎でおこなわれた第1回全国女子選手権大会において、52kg級植村ひろみ(西城陽高校)、56kg級魚留三奈(城南高校)、60kg級山川直美(桃山高校)が優勝、67.5級安宅あかね(城南高校)が準優勝した。この試合の結果、優勝をした3名は、アメリカのフロリダで実施された第1回世界女子選手権大会の日本代表として出場。

第24回全日本社会人兼第15回全日本実業団兼第5回全日本マスターズ選手権大会を京都府岩滝町で開催。同時に京都国体記念杯女子ウエイトリフティング競技大会を開催した。

京都国体記念杯女子大会で、52kg級植村ひろみ(西城陽高校)が優勝、56kg級魚留三奈(城南高校)が優勝、60kg級山川直美(桃山高校)が優勝、67.5kg級安宅あかね(城南高校)が優勝する。

全国高校総体で、82.5kg級西川智之(西宇治高校)がT290kgで優勝。

京都府内3校目として西宇治高校にウエイトリフティング部を設置。

昭和63年

第43回国体(京都国体)ウエイトリフティング競技開催(与謝郡岩滝町岩滝町立体育館他)。

京都国体での主な成績は、少年100kg級安田英樹(西宇治高校)がT280kgで優勝、成年60kg級竹田貢(京都府体育協会)がT267.5kgで準優勝、成年82.5kg級西山浩司(西宇治高校・教)がT315kgで優勝、成年90kg級西川智之(日本体育大学)がT292.5kgで優勝、+110kg級黒川雅司(日本電池)がT305kgで4位に入賞、団体では成年の部が優勝、総合で4位で初の入賞を果たした。

この京都国体で、西山と安田の師弟優勝や西山の3年連続国体優勝など地元の大会として実りの多い大会であった。

第9回全日本ジュニア選手権で、90kg級西川智之(日本体育大学)が、2位に入賞。

第2回全国女子選手権で、52kg級植村ひろみ(日本体育大学)がS65kg(日本新記録)、J80kg(日本新記録)、T145kg(日本新記録)で優勝、56kg級魚留三奈(京都文教短大)がS65kg(日本新記録)、J80kg(日本新記録)、T145kg(日本新記録)で優勝、56kg級山川直美(日本体育大学)がT137.5kgで準優勝、60kg級安田直子(西宇治高校)がS60kg(日本新記録)、J77.5kg(日本新記録)、T137.5kg(日本新記録)で高校生ながら優勝、67.5kg級阿部知子(ユニチカ宇治)がT127.5kgで準優勝した。

昭和63年京都国体、京都府選手団

第20回アジア選手権で、90kg級に西川智之(日本体育大学)が出場。

第48回全日本選手権で、60kg級竹田貢(京都府体育協会)がT267.5kg、82.5kg級西山浩司(西宇治高校・教)がT315kgで共に準優勝。

全国高校総体で、100kg級安田英樹(西宇治高校)がT280kgで優勝。

第25回全日本社会人選手権で、67.5kg級竹田貢(京都府体育協会)がT285kgで優勝、90kg級西山浩司(西宇治高校・教)がT315kgで二人共に優勝を飾った。

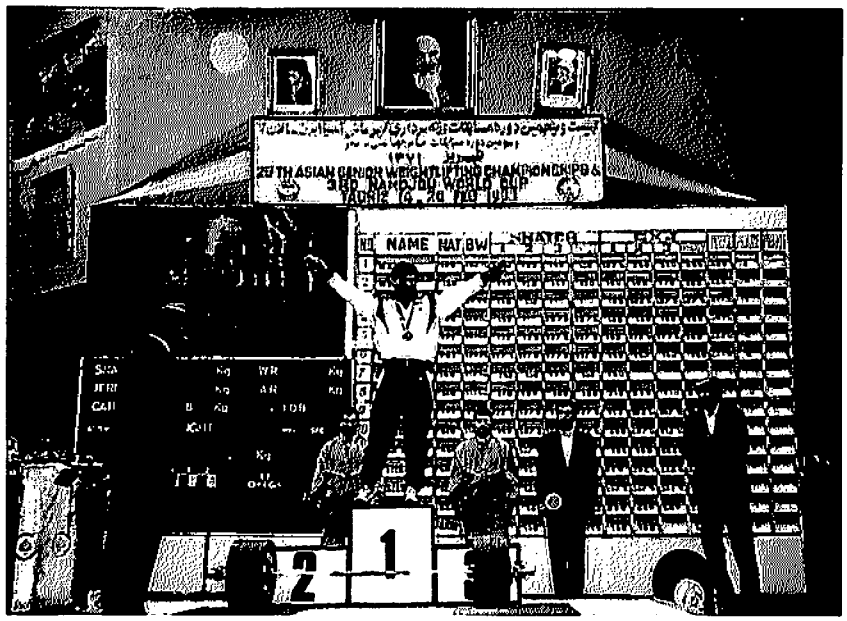
第16回全日本実業団選手権で、100kg級上田貢(城南開発興業)がT260kgで準優勝、+110kg級黒川雅司(日本電池)がT305kgで優勝。

第6回全日本マスターズ選手権で、100kg級大森康正(京都市消防局)が優勝、清水武夫(ステーキハウス次郎)が準優勝した。

はまなす国体記念杯女子大会で、52kg級植村ひろみ(日本体育大学)がT137.5kgで優勝、56kg級魚留三奈(京都文教短大)がT140kgで優勝、山川直美がT137.5kgで準優勝。また、高校生の部で、60kg級安宅あかね(城南高校)がT140kg(日本新記録)で見事優勝した。

日中友好大会には、京都から竹田貢(京都府体育協会)、西山浩司(西宇治高校・教)、西川智之(日本体育大学)の3名が日本代表に選ばれ出場し活躍した。

第2回世界女子選手権大会で、52kg級植村ひろみ(日本体育大学)がT140kgで5位入賞、56kg級魚留三奈(京都文教短大)がT145kgで5位入賞、また、Jは85kgで日本の女子ウエイトリフティ



平成５年、第25回アジア選手権大会、西川智之選手が金メダル獲得

ング界初の銅メダルに輝く。56kg級山川直美(日本体育大学)も８位入賞と健闘を見せた。

平成元年

第４回全国高校選抜大会で、100kg級安田英樹(西宇治高校)がＴ285kgで優勝をした。

全国高校総体で、100kg級安田英樹(西宇治高校)がＴ287.5kgで優勝。

第44回国体で、成年90kg級西山浩司(西宇治高校・教)がＴ320kgで優勝、見事国体４連覇を果たす。また、少年100kg級安田英樹(西宇治高校)もＴ285kgで優勝、国体２連覇を達成。西山、安田両選手は京都国体に続く師弟アベック優勝を成し遂げた。

京都府内４校目として鳥羽高校にウエイトリフティング部を設置。

平成２年

日中友好大会に90kg級西川智之(日本体育大学)が日本代表で出場。

第11回全日本ジュニア選手権で、100kg級安田英樹(日本大学)がＴ300kgで優勝した。

第４回全国女子選手権大会で、44kg級斎藤さと美(城南高校)がＳ60kg(日本新記録)、Ｊ80kg(日本新記録)、Ｔ140kg(日本新記録)で高校生ながら見事優勝した。また、48kg級馬場佐知子(城南高校)が準優勝、52kg級植村ひろみ(日本体育大学)がＳ75kg(日本新記録)、Ｊ90kg(日本新記録)、Ｔ165kg(日本新記録)で優勝、56kg級山川直美(日本体育大学)が準優勝、楠本康乃(城南高校)が３位、60kg級安宅あかね(日本体育大学)がＴ155kgで優勝、安田直子(西宇治高校)が準優勝と京都勢が上位を独占する大会となった。

第４回世界女子選手権大会で、44kg級斎藤さと美(城南高校)がＴ140kgで銀メダルを獲得、52kg級植村ひろみ(日本体育大学)がＴ167.5kgで同じく銀メダル、56kg級山川直美(日本体育大学)も出場ということで京都の女子が世界の檜舞台で活躍を遂げた。

全国高校総体で、100kg級横田達士(西宇治高校)がＴ260kgで準優勝。

第11回アジア大会で、44kg級斎藤さと美(城南高校)がＴ145kgで銀メダル獲得、48kg級馬場佐知子(城南高校)も６位入賞、60kg級阿部知子(ユニチカ宇治)と、安田直子(西宇治高校)はＴ160kgで同記録体重差となり、アジアの舞台で京都同士の戦いをくりひろげ、６位、７位と健闘を見せた。

第45回国体で、90kg級西川智之(日本体育大学)がＴ322.5kgで優勝。

第27回全日本社会人選手権で、100kg級柏木佳久(鳥羽高校・教)がＴ275kgで準優勝。

第18回全日本実業団選手権で、100kg級上田貢(城南開発興業)がＴ255kgで優勝。

石川国体記念杯女子大会で、56kg級山川直美(日本体育大学)がＴ155kgで優勝、60kg級安宅あかね(日本体育大学)がＴ155kgで優勝を飾る。高校生の部で、48kg級斎藤さと美(城南高校)がＴ140kgで楽勝優勝、52kg級馬場佐知子(城南高校)がＴ130kgで優勝、56kg級楠本康乃(城南高校)がＴ150kgで準優勝、60kg級安田直子(西宇治高校)がＴ165kgで優勝と高校女子の世界では京都に敵なしというような時代であった。

平成３年

第12回全日本ジュニア選手権で、100kg級安田英樹(日本大学)がＴ315kgで優勝。

第17回ジュニア世界選手権に、100kg級安田英樹(日本大学)が日本代表として出場。

第９回全日本マスターズ選手権で75kg級佐々木巌(日新電機)が準優勝、100kg級大森康正(京都市消防局)がＴ235kgで優勝。

第５回全国女子選手権で、44kg級斎藤さと美(城南高校)がＴ132.5kgで優勝、52kg級では植村ひろみ(日本体育大学)、山川直美(日本体育大学)、楠本康乃(城南高校)が、金、銀、銅を独占、60kg級も阿部知子(ユニチカ宇治)、安田直子(日本体育大学)、安宅あかね(日本体育大学)が金、銀、銅を独占し、京おんなの力を見せつけた。

第51回全日本選手権で、90kg級西川智之(日本体育大学)がＴ320kgで準優勝、100kg級安田英樹(日本大学)が３位に入賞した。

第４回アジア女子選手権に52kg級楠本康乃(城南高校)、60kg級に安田直子(日本体育大学)、阿部知子(ユニチカ宇治)が出場し、67.5kg級安宅あかね(日本体育大学)がＴ165kgで３位に入賞した。

第５回世界女子選手権で、44kg級斎藤さと美(城南高校)が４位入賞、52kg級植村ひろみ(日本体育大学)がＴ167.5kgで銅メダル獲得、同じく52kg級山川直美(日本体育大学)が出場。

第46回国体で、90kg級西川智之(日本体育大学)がＴ325kgで優勝。

第28回全日本社会人選手権で、67.5kg級竹田貢(京都府体育協会)がＴ290kgで見事優勝。

べにばな国体記念杯女子大会で、56kg級植村ひろみ(日本体育大学)がＪ100kg(日本新記録)、Ｔ177.5kg(日本新記録)で優勝、60kg級安田直子(日本体育大学)がＪ98kg(日本新記録)、Ｔ175kg(日本新記録)を成功させたが、体重差で惜しくも準優勝、67.5kg級安宅あかね(日本体育大学)がＴ160kgで優勝した。

平成４年

第７回全国高校選抜大会で、67.5kg級清水豊(西宇治高校)がＴ235kgで準優勝する。

第24回アジア選手権大会で、90kg級西川智之(京都府体育協会)が４位入賞。

第６回全国女子選手権大会で、48kg級斎藤さと美(日本体育大学)がＳ67.5kg(日本新記録)、Ｊ85kg(日本新記録)、

T152.5kg(日本新記録)で優勝、52kg級植村ひろみ(京都府体育協会)がT165kgで優勝、60kg級安田直子(日本体育大学)がT170kgで優勝、同じく阿部知子(京都シティースポーツ)が準優勝、67.5kg級安宅あかね(日本体育大学)が準優勝した。
第6回世界女子選手権大会で、48kg級斎藤さと美(日本体育大学)が6位入賞、52kg級植村ひろみ(京都府体育協会)が5位入賞。また、60kg級安田直子、阿部知子(京都シティースポーツ)、67.5kg級安宅あかね(日本体育大学)が出場し健闘した。
第52回全日本選手権で、67.5kg級竹田貢(京都府体育協会)がT282.5kgで優勝、100kg級西川智之(京都府体育協会)がT335kgで優勝、同じく安田英樹(日本大学)がT330kgで準優勝した。
全国高校総体で、67.5kg級清水豊(西宇治高校)がT235kgで3位入賞。
1992世界マスターズ選手権で、100kg級大森康正(京都市消防局)がT245kgで3位入賞。
第47回国体で、少年の部56kg級川崎健司(海洋高校)がJ117.5kgで種目別優勝。成年の部67.5kg級竹田貢(京都府体育協会)がT287.5kgで3位、100kg級西川智之(京都府体育協会)がT347.5kgで優勝、その他、少年の平井伸行(鳥羽高校)、清水豊(西宇治高校)、成年の西山浩司(西宇治高校・教)、安田英樹(日本大学)が全員、得点を重ね、団体総合準優勝という過去最高の成績を収めた。
第29回全日本社会人選手権で、67.5kg級竹田貢(京都府体育協会)がT295kgの好成績で優勝、90kg級西山浩司(西宇治高校・教)がT295kgで準優勝、100kg級西川智之(京都府体育協会)がT357.5kgで優勝した。
第10回全日本マスターズ選手権で、82.5kg級佐々木大(日本電池)がT197.5kgで優勝した。
東四国国体記念杯女子大会で、48kg級斎藤さと美(日本体育大学)がT155kgで優勝、52kg級植村ひろみ(京都府体育協会)がT165kgで優勝、56kg級安田直子(日本体育大学)が準優勝、67.5kg級安宅あかね(日本体育大学)が準優勝した。
第5回アジア女子選手権で、48kg級斎藤さと美(日本体育大学)が3位入賞、52kg級植村ひろみ(京都府体育協会)が5位に入賞した。

平成5年

第25回アジア選手権で、108kg級西川智之(京都府体育協会)がT352.5kgで京都府初のアジアの金メダリストとなった。
第1回東アジア大会で、108kg級西川智之(京都府体育協会)がT342.5kgで準優勝した。
第7回全国女子選手権で、46kg級斎藤さと美(日本体育大学)がT152.5kgで優勝、50kg級安田直子(日本体育大学)がT150kgで優勝、54kg級植村ひろみ(京都府体育協会)がT162.5kgで優勝、64kg級安宅あかね(日本体育大学)がT170kgで準優勝した。
1993ジャパンインターナショナルフレンドシップに男子99kg級西川智之(京都府体育協会)、女子46kg級斎藤さと美(日本体育大学)が出場、54kg級植村ひろみ(京都府体育協会)がT170kgで見事優勝した。
第53回全日本選手権で、99kg級西川智之(京都府体育協会)がT340kgで優勝、同じく安田英樹(日本大学)が準優勝した。
第48回国体で、70kg級竹田貢(鳥羽高校・職)がT295kgで優勝、108kg級西川智之(京都府体育協会)がT360kg(日本新記録)で優勝した。
第65回世界選手権で、99kg級西川智之(京都府体育協会)が出場した。
第7回世界女子選手権で、46kg級斎藤さと美(日本体育大学)がT147.5kgで3位、50kg級安田直子(日本体育大学)が出場した。
第30回全日本社会人選手権で、70kg級竹田貢(鳥羽高校・職)がT295kgで優勝、76kg級影山博文(立命館大学・職)がT282.5kgで準優勝した。
第11回全日本マスターズ選手権で、76kg級佐々木巌(日新エンジニアリング)がT157.5kgで優勝した。
わかしゃち国体記念杯女子大会で、59kg級安宅あかね(日本体育大学)がT157.5kgで優勝、高校生の部で、54kg級岩井はるみ(加悦谷高校)がT125kgで3位、70kg級山口晴美(加悦谷高校)がT122.5kgで準優勝、+83kg級前澤智栄(加悦谷高校)がT142.5kgで優勝した。
京都府内5校目の学校として、加悦谷高校にウエイトリフティング部を設置。

平成6年

平成7年度の第10回全国高等学校選抜大会の京都府開催が決定される。
第9回全国高校選抜で、+83kg級前澤智栄(加悦谷高校)がT152.5kg(高校新記録)で優勝した。
1994ソウルインターナショナルフレンドシップトーナメントに99kg級西川智之(京都府体育協会)が出場、女子50kg級に斎藤さと美(日本体育大学)が3位に入賞した。
第54回全日本選手権で、70kg級竹田貢(鳥羽高校・職)がT285kgで準優勝、76kg級影山博文(立命館大学・職)がT290kgで準優勝、99kg級西川智之(京都府体育協会)がT335kgで見事優勝。
第8回全国女子選手権で、46kg級斎藤さと美(日本体育大学)がT140kgで優勝、+83kg級で前澤智栄(加悦谷高校)が3位入賞。
広島県で行われた第12回アジア大会で、女子46kg級斎藤さと美(日本体育大学)、99kg級西川智之(京都府体育協会)が出場し活躍をした。
第49回国体で、70kg級竹田貢(鳥羽高校・職)がJ165kgで優勝、99kg級西川智之(京都府体育協会)がT332.5kgで準優勝。
第31回全日本社会人選手権で、76kg級影山博文(立命館大学・職)がT292.5kg(大会新記録)で優勝、108kg級西川智之(京都府体育協会)がT335kgで優勝を飾った。
福島国体記念杯女子大会で、64kg級山口晴美(加悦谷高校)が3位、70kg級藤原広実(加悦谷高校)が3位、83kg級前澤智栄(加悦谷高校)が優勝と加悦谷高校勢の活躍が目立った。

平成7年

第10回全国高等学校選抜大会を京都府亀岡市亀岡市民体育館で開催。第1回国体、国体2巡目のトップとなった第43回国体につぐ全日本規模の大会であったが、日本協会、全国高体連、また、兵庫県協会をはじめとする近畿の各協会の御協力と全国各地よりお迎えしたハイレベルの多くの高校生により、盛大な大会となった。
京都勢の成績は、99kg級中江孝行(加悦谷高校)が1年生ながらも5位入賞を果たした。また、女子64kg級山口晴美(加悦谷高校)が優勝、女子76kg級藤原広実(加悦谷高校)が2位と健闘した。
第55回全日本選手権で、99kg級西川智之(田辺高校・教)がT335kgで準優勝した。
第9回全国女子選手権で、50kg級斎藤さと美(日本体育大学)がT137.5kgで3位、76kg級藤原広実(加悦谷高校)がT160kgで3位、83kg級前澤智栄(立命館大学)がT145kgで3位入賞した。
全国高校総体で、70kg級渋谷公二(西宇治高校)がT237.5kgで優勝。
第50回国民体育大会で、76kg級影山博

文(立命館大学・職)がT280kgで4位、99kg級西川智之(田辺高校・教)がT322.5kgで3位、70kg級渋谷公二(西宇治高校)がT240kgで3位、99kg級中江孝行(加悦谷高校)がT265kgで3位入賞した。
第32回全日本社会人選手権で、70kg級竹田貢(鳥羽高校・職)がT270kgで優勝、99kg級西川智之(田辺高校・教)がT312.5kgで準優勝、団体戦でも、みやこクラブが初出場で3位入賞という快挙を成し遂げた。
第13回全日本マスターズ選手権で、99kg級大森康正(京都市消防局)がT210kgで優勝。
ひろしま国体記念杯女子大会で、46kg級斎藤さと美(日本体育大学)がT142.5kgで優勝、76kg級前澤智栄(立命館大学)がT145kgで準優勝、高校の部でも、46kg級鹿田知里(加悦谷高校)がT125kgで優勝、64kg級山口晴美(加悦谷高校)がT150kgで優勝、70kg級藤原広実(加悦谷高校)がT167.5kgの日本高校新記録で優勝、76kg級辻美帆(鳥羽高校)がT145kgで準優勝し、日本高校女子界で京都の力を見せつけた。
平成9年度全国高等学校総合体育大会の京都府1府単独開催が正式決定。ウエイトリフティング競技会場は与謝郡野田川町の加悦谷高校体育館となる。
7月には野田川町・加悦町に準備委員会が設立された。

〈現役員〉

会長	新居田耕三		
副会長	西垣 進	佐々木 大	
	田邊 知隆	佐野 保	
理事長	西垣 進(副会長兼任)		
理事	出岡 道夫	安田日出樹	
	岩田 幸一	吉田 三郎	
	上田 登	上田 貢	
	金子 飯久	西山 浩司	
	柏木 佳久	倉 浩作	
	辻 清雅	統木 良介	
	竹田 貢	前田 武志	